



南の柯の夢

笠屋之勝赤根羊七
節操全傳

第七ノ卷

編者曲亭畫邇北齋
新研策子



特別
~13
3148
7



へ13
3148
7

三七 全傳南柯夢卷之六下

長町の五味下

東都

曲亭馬琴編次



後浪嘆息。痛死哉。只ひとり子を失ひ又や今る哀別離苦。かゝるも
もどひ平。その嫩さを慰る。陪後の童を進らさべし。とらひわけて縁類小五
外面をさう招け。豫さうさうやね。うん。入の奴隷。轎の戸を細くし。扉を
うた。抱た。ある。稚児を。三條の邊。よえて。且。不審。且。鈔。び。忙。しく。さ。り。り。
喃。あ。る。色。喜。し。や。恙。さ。り。り。わ。と。ち。ち。を。覚。亦。と。ら。ら。笑。て。抱。た。と。れ。ば。小。確。し。か。よ。
母。に。と。れ。え。あ。ら。ぬ。叔。と。よ。阿。婆。と。ま。が。の。赤。い。衣。三。つ。も。四。つ。も。後。刺。て。俄
頃。よ。續。と。お。る。木。偶。と。い。ぬ。り。と。弄。賣。同。よ。家。浪。の。舊。の。処。よ。ゆ。く。又
三。條。よ。對。ひ。真。夏。を。慰。る。さ。あ。の。陪。從。の。女。の。童。ま。り。め。の。わ。じ。寔。よ

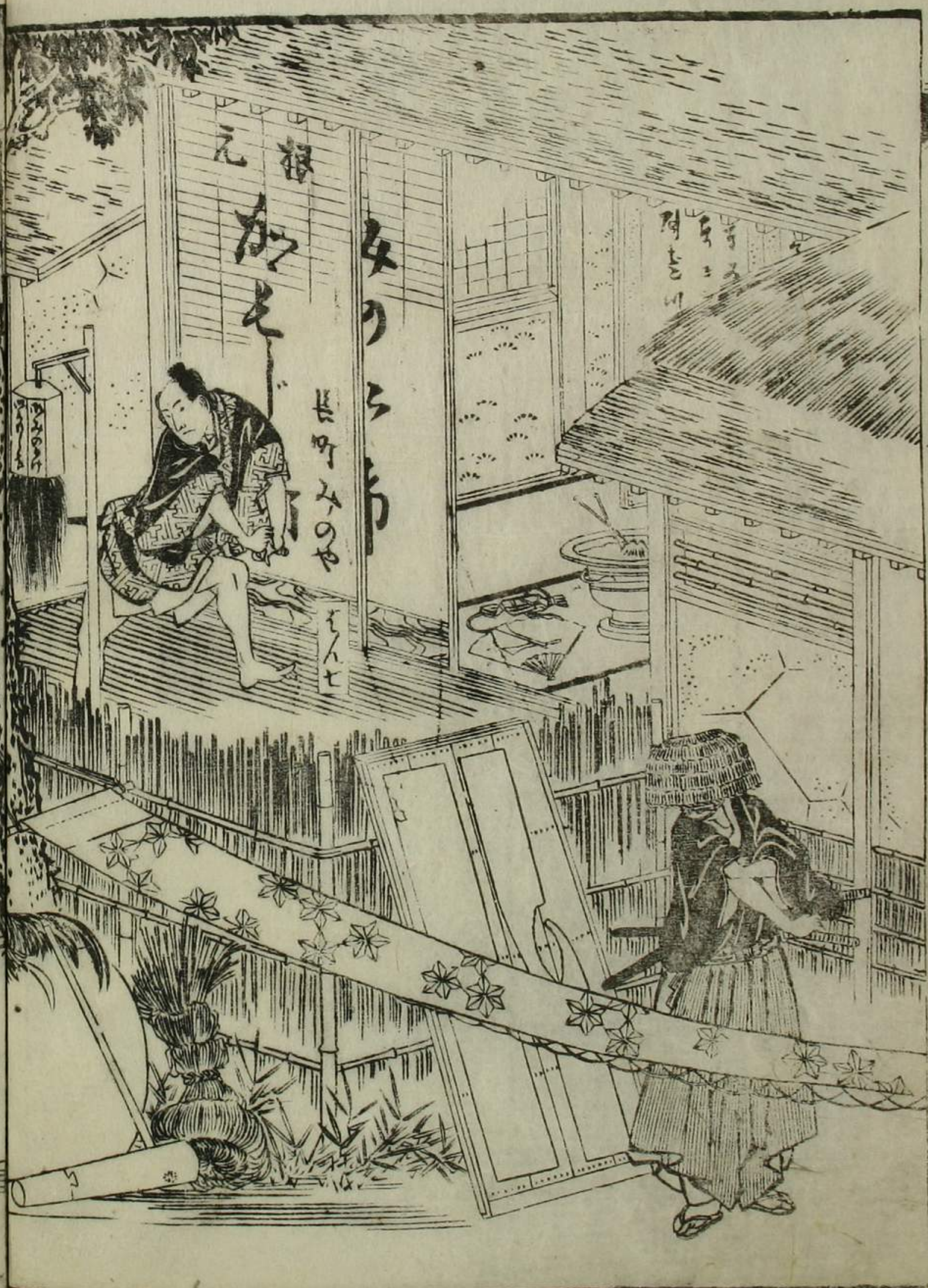


世上
萬般哀苦
事
無非死別與
生別

師
走の
生列

養五隱居

西河...



元
か
長
み
の
や

申...

賊とつらんも。登据あり。且己とをゆべとつとも。厚余氏といひつることを
 食う。その十年が程。牙とつた。世の営をぬ。刺身價を返さる。
 くれは。是乱離の人。竹をり。大受といわれん。ともわく。こもす。七か。死
 べん。今宵あり。されば。と。その。自言せ。平三との。係累せん。欲。彼
 青山の。酒あり。その。の。碑を。千日寺の。草の原。よ。て。破。よ。る。こ。こ。ん
 己あん。といひ。も。果。む。さ。り。去。らん。と。せ。る。夫の。裳を。二。緒。ハ。慌。忙。て。川。ぬ。め
 ぶ。と。束。さ。絞。首。加。られ。主。親の。面を。け。ん。う。り。自。殺。せ。ん。と。思。ひ。定。め。た
 ち。ふ。を。理。あ。ら。む。と。い。ひ。け。り。ね。ど。が。ろ。を。よ。と。そ。ゆ。え。ぬ。い。て。あ。て
 ち。や。ま。さ。ぐ。三。勝。を。い。が。せ。た。め。の。う。た。ぬ。ひ。つ。る。今。方。よ。迫。る。牙の。眞。意。を
 彼。如。よ。て。す。め。り。と。や。ら。ら。ま。ら。ぬ。知。さ。く。又。伏。し。君。が。年。末。の。情。を
 答。け。り。と。い。ひ。も。終。ら。む。夫の。口。よ。ふ。を。掛。せ。ば。守。て。急。し。押。と。ぶ。

びよと。い。懐。ぬ。濡。ぬ。先。と。を。あ。も。も。厭。ハ。夫。婦。か。と。も。厭。ふ。と。い。ひ。あ。り。今。こ
 そ。以。身。む。ら。が。ま。よ。う。け。く。志。を。改。ま。せ。べ。し。只。悔。し。ぬ。白。河。を。流。死
 せ。し。ら。辛。三。との。滅。む。を。地。よ。も。る。の。面。目。あ。れ。と。身。を。恨。を。理。み
 せ。三。勝。の。う。ら。う。ら。は。ら。有。身。の。親。娘。親。と。親。ハ。駭。り。あ。ら。う。何。れ
 を。づ。れ。と。う。た。が。た。思。を。仇。あ。る。身。の。終。で。あ。ら。一。筆。送。さん。と。う。り
 硯の。蓋。み。う。し。墨。の。曲。と。直。あ。る。管。の。筆。を。さ。ら。と。硯。に。浸。し。
 出。居。の。障。子。よ。あ。く。む。ら。り。

天木集信史朝臣

と。書。寫。せ。ば。守。て。も。あ。ら。も。み。守。を。と。り。さ。く。
 同集雜十四夜登内府
 かく。は。この。う。た。ぬ。を。さ。ら。と。さ。ら。と。ま。あ。ひ。の。鬼。を。つ。ら。が。あ。れ。ば
 と。ま。ら。ぬ。守。を。と。り。さ。く。外。面。う。り。殺。を。未。だ。る。捕。子。の。兵。士。相。合。橋。よ

て人を殺さしませ七を搦捕らんかよ向たり。縛受らんとりたさるく。
跳るるを引被死。雄多雌多、撲比と投るを。飛踏る又組著をぬり
拂ひて打倒し。うらむくと投退て秀ぬへとくませ七の妻のまを
引きり知る。月よの暗死諸打た。か門近くぬり来る。平三直とゆさ
らぐひえりて。その二務歎皆よのあめりどや。と同隙も荒田の
兵士亦が葛蔓よませ七をくじと追蒐出。えよすしむを平三が足然死
し。丁と蹴倒し。流て懸るをとく引布らうまりとよ。とゆかよ
られ。色もせりと掌を合し。あ流とつ妹と夫か又よをとりて死
かゆ。今宵一夜成千日の墓のたりの命あり。

千日寺の証

さてもませ七の勝ハ。往來往るを竹ほどよ。彼此もて夜を流し。候の雨あり

さくわ。ひこそるなれ夜の傘も。人前をまの骨ハ。稚少うむつまん竹田
伏えも外よえ。只後髪むけそりの町を。雄よは吸。道田毎星の影水る。身ハ
捨果る。多たりのと。あめんど寒死北風。追れ西をのむる。師ま七日を
亡日と。あめりでもらう。跡は残り。稚児の又よ母と啼る。春のうな
らん浪花津の梅が。笠と養虫の親の。か鬼る。黄金も玉の。何うせん子
よ。宝るたりのを。それ今ハ。あひ絶る。喜怒哀樂も。また夏の。浮世これ
と。醒ぬ。間酒煮。賣夜商人。か為る。ねど寒。念佛の証の音。へ何と
る。耳のうなる霜の声。常迅速束の間。千日墓。又よ。時は永祿
某の。年冬十二月七日。かしてませ七三務ハ。立る。く。印塔の。同る。枯柳の
下。又よ。を。た。う。覚。放。を。究。れば。夫婦。物。ひ。づ。も。あ。三。務。が。十。遍。を。り
唱る。念。仏。の。声。を。を。ゆ。ませ。七。女。周。は。異。く。腰。の。刀。を。抜。く。る。せ。墳。の。後。こ。又



河原

27

27



おくらの
きくも
あつち
ちと境
る新
まも
うれはと
あま

半七三勝
夜十日寺へ
あ

23

23

河原

23

二人苦痛の称名今般とあり。夫婦はをを大に怪しむ。何れに等しく又こゝろ
 みる。自叙する人やの。其後とてお七が。ゆきび又をあり揚し。かゝる心むす
 行くと。ゆきめつ。厚倉二郎太夫友春ハ。戦松曾太郎と。も。蝶九郎は
 素をくして。これを可ぬホム。川。飛が妙は。まうある跡は。続々。卒三ハ。お通と。脊負
 ひ。室を。扶掖。喘く。追。鬼。承。く。ゆき。く。生。と。挑。灯。の。火。光。は。照。る。と。墳。の
 後。は。や。り。ゆ。く。ゆ。く。と。表。浪。と。す。六。也。間。五。七。尺。を。隔。く。自。害。す。半。七。ホ。を。見。て。忽
 ち。又。は。緯。切。り。人。も。う。の。景。迹。を。見。る。大。の。驚。を。夫。婦。兄。弟。幼。也。お。通。も。共
 みる。と。位。式。ハ。悲。し。或。ハ。呆。れ。こ。ら。その。ゆ。き。と。て。慌。忙。つ。ま。り。身。抱。死。記。し。く
 こ。ま。ぐ。お。勲。と。ども。今。ハ。ハ。や。救。へ。く。もの。ゆ。き。と。見。且。ハ。備。る。る。石。塔。は。二。枚。の。送。虫
 を。貼。あ。は。る。う。その。と。は。二。所。太。夫。と。て。對。し。す。七。ホ。よ。り。み。や。り。各。の。衣。傷。い。と
 埋。れ。ど。つ。く。く。の。送。書。の。記。を。見。る。赤。根。才。六。也。昔。深。利。を。謀。り。て。本。指。の

宗を骨とせしむ。遂に米谷なる。老楠樹を伐り。く。忽ち恨く。丹波都を
 叙し。更は約よそむさく。三勝を失ひ。戦松氏と替縁を締り。る。ゆ。き。と。て。つ。く。く
 ぬる。藤。子。う。り。と。ハ。曉。る。う。く。近。曾。守。七。ハ。三。勝。を。ぬ。く。長。町。は。活。業。と。傳。へ。ば
 け。つ。憤。は。堪。が。く。その。虚。実。を。あ。ん。為。よ。昨。夕。潛。は。五。條。の。家。を。潛。び。出。衛
 へ。表。浪。と。三。勝。と。親。子。の。名。告。せ。始。終。を。竊。笑。り。て。そ。し。と。く。夫。婦。の。忠。孝
 公。烈。を。あ。つ。く。懺。悔。後。悔。し。く。ま。つ。く。自。叙。する。ゆ。き。と。預。く。三。條。竹。原。あ。つ。く
 二人の悪根を叙し。又昨夜相合。搦。あ。つ。く。全。八。を。叙。せ。り。ゆ。き。と。六。と。市。の。正。へ。旗
 恩。人。笠。松。才。三。と。か。子。守。七。を。救。ひ。ゆ。つ。べ。と。あ。り。又。表。浪。の。送。書。ハ。二。人。の。女。兒。が
 公。標。の。比。ま。た。ま。ふ。り。羞。且。三。勝。が。死。を。究。る。氣。色。を。猜。し。か。か。れ。は。ま。立。て。自
 害。と。お。ハ。子。共。ホ。心。死。を。お。し。さ。う。厚。倉。内。に。ま。夫。を。練。く。氣。被。の。身。の。あ。ま。り。を。お。た
 へ。計。じ。ゆ。き。と。之。も。孫。の。通。が。不。便。う。典。儀。と。の。年。末。の。恩。を。こ。し。う。と。恥。づ。る。

夫とてあつた送るべきあり。かゝる親と親とのひあはねど。その身を殺して子を救は
 慈悲の符節を命するが如く。うらみも死なうと。又いふ悔歎くべうと。時を
 君侯近曾二郎太夫を召さうと宣ふとあり。赤根守七郎。家内一番の忠
 臣なり。彼吉稚九郎徳いふ。洛のありする日主の偏樂を練て遠離らうとあり。こ
 れを匿し。その身病めりと稱して五條の旅宿より退れ。絶く口外へ漏らうとこ
 れを比屋まの二條をすうとて彼めの舞をわく。逐電つらう。亦乞主の
 為まことと猜し。まこと家の法度へ私より更改がなれ。目く忠臣を遠離らうと
 のと不便あり。今のや鞍の年月を経れば。罪を省べた時到来。汝潜まば
 七が在家を愛し。志を告ぐ。付ひ来ると仰せらる。志のびく浪花に記を
 かつ。同人をりく。窺さるふ。三務が身價を。これ返さんとせらる。その金三
 十あをまひへらうと。いふ。昔公よりと。假毛を買ふ假托。件の金

贈りし。いかにすまらざるを。憎む。全八蝶九郎を奪ひ去らう。そとあるふ
 蝶松曾太郎。とうとうども相合持あり。時流つ暇まんとせらる。蝶九郎を生拘
 這奴が盜らうの金ハ。舊のどくや。まかま返さう。いして蝶九郎が白状。よつて
 全八が隠匿いふ。度々それバ澄迹とらう。の蝶九郎を市の正へ進らせ。辺の罪状
 を刪へらう。曾太郎は相持。今彼処へ引せん。とて寔は天の彰く。なるの。是を
 ざる境のど。悪人終に亡びく。忠臣や。び天目に入る。推う快とせらる。中での。密番は
 遊承の曾太郎も入らう。某浪速へ外へ。ひるの。まて。の。妹が。公。標を。ま。せ。ん
 とくく。あるふ。母。か。り。と。う。と。ひ。と。う。う。く。園。花。を。橋。を。棄。て。く。の。地。は。外。に。り。
 不也。浅は。年。外。の。本。意。を。遂。く。離。別。の。女。兒。三。務。が。の。再。會。と。り。の。却。り。
 その。公。烈。は。羞。え。旅。宿。へ。ゆ。り。中。途。より。往。方。を。ま。る。う。後。は。又。の。園。花。も。母。子
 伴。ま。る。長。町。は。鼓。搦。の。中。の。め。り。の。ど。母。取。り。三。務。が。の。あ。の。せ。ど。彼。の。い。ふ。は。

つら 通をおく旅宿も立つら 縁故を其は物たるも母の従者亦まうら
 如此くこと告うてりか兄才ゆき怪をば病若を思ひお通をわて彼
 此を索るわいもえうらびて立松平三は名告めひひ辺り又三務どのと二首乃右
 命を書き送下 自叙せんともおひぬるはをせやくんく周章一かてりうたみ
 ころは意承まうとのいふ平三も又説と一編理を竭して自害をせやくが三務室
 花とくくは七の親の慈愛のついでなるふ君思とて黙止せうて紅俟袖を
 效のくど死後とる悔一さうとてうたは流ぬ流ぬ編笠ふうくさる武士一人白
 揚の蔭よりこくさ出さる笠を授捨るをえまが蜷松典孫このと典孫の衆人
 は射くひやうとてくく件の禍を醸せりまは六一個の恨のさうたれも又
 當初君またとめく楠を伐らうる宗を惹るま愛は満まうくろづ私
 たる罪ありふ今叙妻浪が聖心をわく天神の天神へ請るうさひふよ

疑一をいふとてそれも又僧は奈良を出家の迹を跟くそのゆく亦を察ひ御下
 三務と妻浪が始終の物ころを竊せりて年外の憤も消五十餘年の非を
 ありぬとてそのとてそれ等しく裡の容子を張ひるめめいすは六あうありなる
 う。れこれ。ま。ま。えんちた。おんててむおふりかまう
 秋彼もとも皆まが為の若智識なり棄恩入る報恩者とり預くハ
 友春との典孫が致仕のりをよたは執一ゆらとと迹をり刀を抜く直は
 醫者を剪捨くくく夢幻齋と名告る人といふ二時太夫やうく嘆嘆
 淳子替が踐宮の栄花もどハ赤根が南柯夢蜷は名歌る蜷松氏の幾は公悟
 道殊傍ありふうらこのふか買たる長髪髪を三務が改醫者と一又假をま
 七が醫者は換又と母との塚は築籠嵐雪信女月照信士と法号一赤根まま
 の商人八の葦屋三務といふ舞くと情死せいと世は傳るが郎君のふん悞は代る
 そらめの忠義もいづつうる親の狂死に従る孝子の道も虧べうらば再世



南無阿彌陀佛

三十一

夫婦君父の命は従ひ奈良へ及来し家と興し忠孝を全せん吾黨
 の一大怪するをんと應る時は典儀又年三は對ひ其許の舊梨園雜劇
 中の入ると皆いふがまの武士も及ぶる女妻しと女児園花久く夫は置
 去りしれ及とるる一は辺今より彼を養う女児とあめつとバツれ又三務
 を養ひ曾太郎が姉として更はず七は妻のあまふとたの三務はまてが正
 室より聖花又七が側室とるる姉妹あま姉妹よの久執つこれを後
 るたのり兼川ゆへうとくが年三教ふ一浅も及ぶ鮮既は團圓はまてこ
 下ぬる親はず七曾太郎三務聖花は兄弟親族の名對面して歎の中の教を
 速又母の亡骸を十日寺に蒸りし追善の佛より叮嚀し終れし志して後
 皆うちほしとらる南都へ立ぬるね又曾太郎は市の正へ縁故を審は新蝶
 九郎を進り母の積悪後がて蝶九郎の首を刎らし又笠松年三を

最も脚平足平を殺しこれの彼ホ二人の悪を思提するよめて死をのり
 その罪を贖ふ及がび永く赦免を蒙り安く続井家は百れく禄五十
 貫をぬり亦根羊六は代りて五條の村主をうけぬり七は蝶松典儀を
 代りて家老職をうけぬり職禄とも肩を比るりのやとれとるて三務を
 妻より園花を側室と厚倉と共に一團の成敗をとりけふは聊も私さる
 ぶくが若家さうとく敏昌とく四民とく又母のぢひをさるるどといふるは
 是れまたふかおんせうふり。三務は。嘆賞して懇切は
 るをり先続井順眼父子はず七三務亦が忠孝をふく嘆賞して懇切は
 せんを分ひ厚倉以下の家臣を咎む集りいひや。抑との件の縁故を考
 るよん過る驕奢を耽り怪有の良材を索る米谷の捕を伐り
 びやく。とてい。つ。く。嬌男上。稚質
 弱又病るり。且彼が養生の為は。終は。拵。不。至。く。勿。心。地。家。の。難。出。来

ろんとつらつら木精の祟りたる後守七郎太夫のうりせり又子安と
 あり今日の飲會をのりてありかきと頻に慚愧し俄に彼茶亭を
 毀てて節儉をとりとせり上安堵のよしをうつらみ至くまて落つ
 吉雄九は苦練りたる却全八蝶九郎ホは讒言せり久しく君辺を遠ざけ
 らるるといへども母昂君の恨をせよとせり病ふるも五條小退保親
 ことといひ搦後終に三勝三ホホも実を告ぐとえり一ツツも口おせし
 や父をしのひ條ありその忠をよひやるといふ時の人稱賢せらるるは
 三三の通を養ひ後られみ婿を招く家を嗣しませ又子との駈を儲
 せり統井家み仕りとも馬琴按ぶるも本草綱目卷二十四木類下は柳樟
 を並出せりといふも別種あり。又邦人の柳樟ともいふと訓どこれを一
 なるがごとく又按ぶるは搜神記は呉の時敬叔大樟樹を伐るも血出く物あり
 入の面狗身あり敬叔がゆられを彭侯と名つくと乃きふくられを食ふも味
 の如しといふ是則樟樹は木精あり一燈とて捕由樟由究く大木より
 俳諧師其角が捕の天井は顔とる發句あり。旭ぼてり。

八疊の捕の扱間を備るるはぐれ

又守七三勝がりの世ありとてふりゆり或はゆり益屋三勝は足利家の時の
 女役あり又十日寺あり晴死せり三勝は遙の後のはりあり美濃を何うか女
 見せんと嘆きける遙婦あり今も海をいませ七が選書といふのあり好むの
 りの往く傳写とありは早が活説とる統井家臣赤根せと大和五條の
 人ませがりのとく似たり。あつれども時代相拒と違ふり。同名異人あり
 あり。玄峰集を按ぶるは俳諧師嵐雪あり三年の秋浪速は好むり
 みの益苗が夏の夜を初め嵐雪月照と石の塔は影入りあり。あつれ

ふらふらねどどひうぐさうけ色や。

夢ゆめふらふらゆめ似にきくる夢ゆめうねゆめ墓むらまゐり

と口くち辨わふるふらふらえんえん惜しのむらむらのの今いまはは吾われ寺てら難なん波な新しん地ちのの遺いるるとところ

のまのせせをを入いがが古こ墳ふんといいふふのの金きん毘ひ羅ら堂どうののとと向むかうう左ひだり側がはのの六む字じ

の名な号ごうののをを彫た磨ら著しうう彼かののをを傀くわい儡らい棚たなのの戯ぎ曲きょくとと他たりりのの平へい子しが

眼まなこをを過するるふふととぐぐ四し本ほんありり又また彼か亦またがが送そう書しよ當たう初しよ入い口くち又また膾え炙しせせううや

暖ぬる竹たけといいふふののよよ三さん持ぢまませせがが紀き念ねんありりううをを置お置き亦またのの曲きょく子しありりせせとと並ならぶぶ

辨わるるれれどど只ただそのその槩がい略りやくををいいふふののとと

▲作者馬琴ばきんとの書しよをを稿こう本ほんををつつるるのの夕ゆふ燈とうをを掲か案あんをを拊ぶむむとと

葉はととくく云いむむうう信しん濃のう前ぜん司し杉すぎ入い道どうのの平へい家け物ぶつ語ごのの原げん流りゅうせんせんと

くく他たりりととうう後のちのの人ひとははくく由ゆ見みざざれればば只ただ尋じん常じょうのの軍ぐん記きととののとと也や

めめりり今いま下くだるるかか南なん柯か夢ゆめのの讀よみせんせんととくく他たりりとと聞き者しやそそのの戯ぎ曲きょくののた

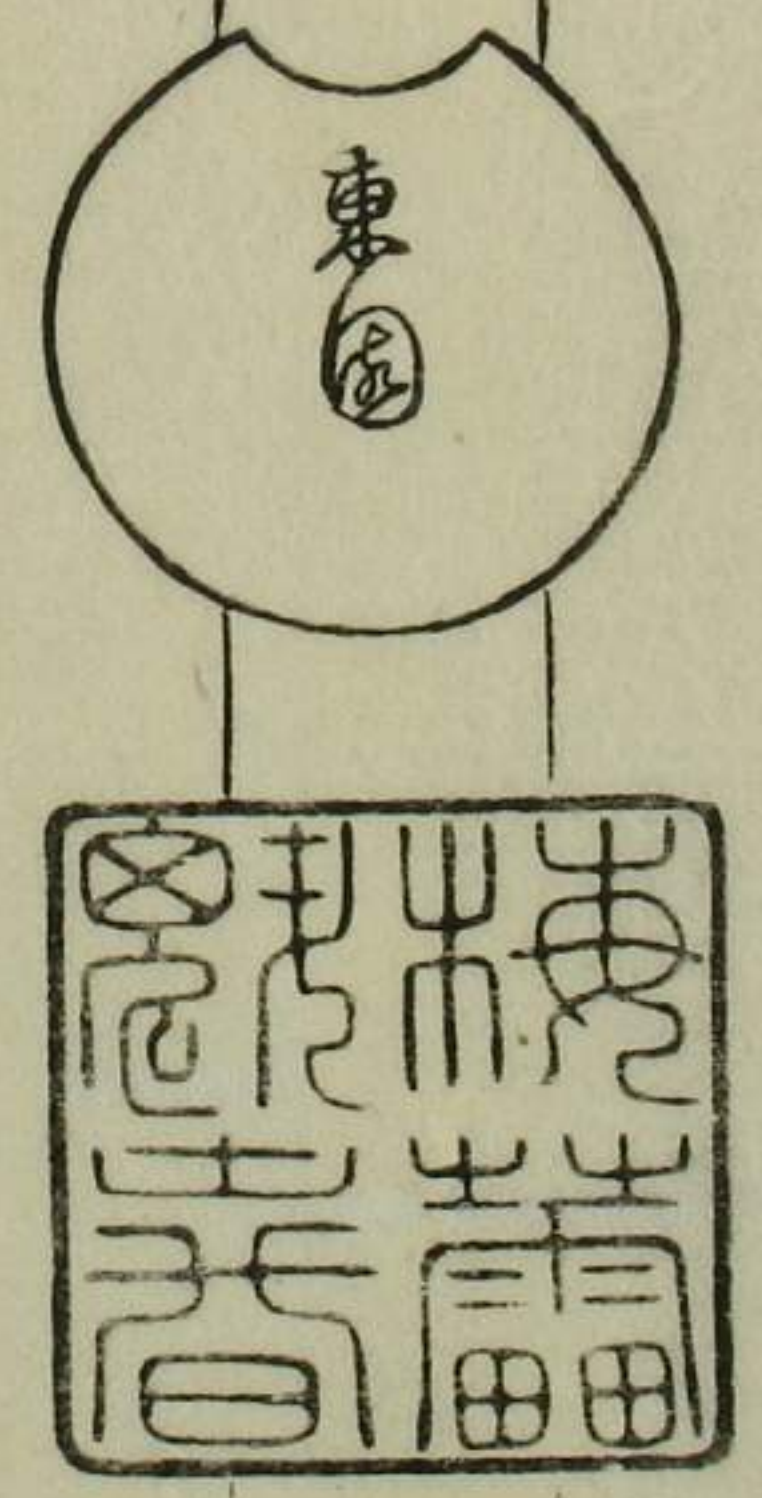
たたるるをを笑わらふふももああるるべべしし才さいのの長ちやう短たんとと物ぶつのの巧こう拙せつのの且かつくくいいふふととふふ為なすすべ

雅みやび俗ぞくありり又また流りゅう行ぎやうありり夫おつと流りゅう行ぎやうのの人ひとははああるる故ゆゑおお我われよよのの故ゆゑこれこれいいふふと

これこれををああららわわすすとと差さ夫おと。

客有問於予曰曲亭先生何號稱之曰曲亭
 予應之曰漢書陳湯傳云樂巴使曲亭陽
 是美亦向馬禁何也曰取十刻鈔野在公
 句才非馬所彈禁未能身異鳳史吹築猶
 杜以為我稱也先生嘗思慕司馬亦如才
 是以名解字頊言解蟹也郭璞江賦云頊
 結腹蟹水母目蝦其象名於蟹也王言之
 所夢示是長知故事也寔然然而喜曰吾
 我與君一夜話勝似十年學去思向常以
 乃為禁熟字於考據而今同諸子則竊
 然得其淵源顧昔者司馬長知慕蘭相如
 為人復名相如今也曲亭子慕司馬亦如
 才而名解稱馬禁以我雖和漢今昔異
 其趣宜同年而終之先生聞之改曰二子
 蓋知彼去興石而終暨于茲也嗟夫似而
 非之者齋魯曾參字我居二子深蓋之復

莫言客唯々而退予時方東粟師余校南柯
 夢若干中因悉決是語附於卷後云
 大化四年乙卯冬十月中浣夕子東園魁
 蕾子書於東都叢堂軒時兩窗



心志 曲方亨子琴



魚工 為所小每



割劇 高橋待人

俊寛僧都嶋物語

全六冊

阿弥文松傳秋七種

全五冊

桂華秋波新語

おん長巻つ
か物かたり

瀧口横笛想夫憐

おのりきり
宗とけ

梅川忠兵衛大和紀行

二の「い」の
巻や末とん

糸櫻赤繩奇編

おのりきり
宗とけ

右曲亭先生近日著編題目以今所聞録十之二二人共賦

○戊辰孟春發兌木蘭堂綉梓書目

三勝半七節操全傳南柯夢

曲亭主人著
北齋老人畫
全六冊

阿波北鳴門

種彦著
北齋畫
全五冊

由利稚菰居鷹

竈馬著
北齋畫
全五冊

江戸書肆

須原屋市兵衛

文化五年戊辰正月吉日發販

深川森下町

榎本惣右衛門
榎本平吉梓

○宮田先生評編國字新書

翠玉堂精鐫發行

繙譯 畫本通俗兩國志

兩國志
繪卷連
林

此書見宋金兩國の合戦七十余年の間の事歴代いと委しく記し書し
の繪本にして海内各處の國字餘反音書あり林宋金兩國の事
ハ萃集する系図の如く古今の事大凡そ諸君が御覧の如く
の如く兩國の情実を盡し繪本にして國字餘反音書あり林宋金
兩國の事大凡そ諸君が御覧の如く
。此中又中々司馬光歐陽修蘇軾等諸賢の傳記あり
まはしむる相傳の傳記ありて是れ一應の事なり三冊編
天保六年大合戦を仔細に述べる細書宗沢張叔夜岳元張浚等世

浪花 好華堂主人著編

大伴金道忠孝圖會

全部十冊近刻

此書、天智天皇御宇、少百姓國、緩の兵と遣はれ、更之首と、根大臣が燈臺鬼と成、
一、謂大伴真鳥、兄と、対々家園と押領せ、
一、奸悪大友白毛子、浄見原天皇と御合戦の
次弟、金道の生、立白虫、木鳥の忠義、雅明
が我、真鳥の奢、秘金道、万苦と凌て、父
乃、仇と復、本領小安堵せ、追の奇変と
渡、子、紀、廿、実録、未、勿、論、夫、小、繪、加、
善と、勧、め、悪と、懲と、便と、と、面、白、新、本、也、
経

同上

扶桑皇統記圖會

全部十冊近刻

此書、入皇四、代、天武天皇の御治世、より、六、代
醍醐天皇の御宇、迄の公事の根元宮社寺
院の草創、代々の人物の行条を、記、と、所、謂
役行者、安部仲九吉備大臣、衣通姫、光明
皇后、良弁僧正、弓削道鏡、惠見、押勝中
將、姫傳、教大師、弘法大師、田村丸浦嶋、が
子、小野篁、在原行平、業平、小野小町僧
正、遍照、菅直相、其外、古人の、実傳を、探、と
精、輯、録、一、悉、く、圖、画、と、加、一、重、富、の、書、と

近代世事談

東都俳林右京大人著
全部五冊合巻三冊

此書、東山殿より、以、美、吳、服、食、菓、音、木、花、草、等、踏、跡、物、立、代、末、極、の、千、變、
諸、流、畫、畫、詩、歌、演、講、香、茶、生、花、刺、繡、及、芝、居、の、世、京、八、景、等、を、
行、事、故、實、何、の、の、事、り、何、の、事、り、何、の、事、り、何、の、事、り、何、の、事、り、
徑

近代世事談二編

楠里亭主人著
全部五冊繪入

此書、天地萬物の、實、事、小、冊、一、冊、を、一、冊、と、し、て、用、た、形、の、人、の、形、
等、の、原、由、の、由、の、由、の、由、の、由、の、由、の、由、の、由、の、由、の、由、の、由、
漏、れ、の、
船、時、間、の、時、間、の、時、間、の、時、間、の、時、間、の、時、間、の、時、間、の、時、間、
櫻、耳、實、權、と、稱、す、る、其、後、者、後、曲、高、松、の、祝、古、殿、の、奇、事、等、を、

金匱...の并武...
非人...
刀劍...
入事...
遺忘...
同三編 全部五冊續上梓

同三編

全部五冊續上梓

萬壽國考 全冊 京都府立先生園

萬壽國考 全三冊 京都府立先生園

山本八物...
錦繪...
右の...
山本八物...
錦繪...
右の...
山本八物...
錦繪...
右の...

書肆

八坂心齋橋博勢町

河内屋及兵衛梓

女訓 姿見 **女前訓** 種 全一冊 鳴渚菴先生述

鳴渚菴先生... 七才より十二才までの内小... 後男姑父母夫... 賢女節婦の傳とまげ... 女の式化法子と育つ事... 男女相性名類字... 女前訓奇... 較す条も鳴渚先生ふらくん... 切相...

女くありぐく縁入しを事文をよやともなりてあり
大字小志く先んべきと婦女の義訓は海内七賢
詩書幼推り一代子成たばしは續量のの村の昨と
雲をべしと婦徳を備ふる大いよ有益の書なり

心學子五則

全量冊 澤田折山先生作

人倫に正法といふを持敬積仁知命致知長善の五則と
わきも學ばざれば是れ成りて先聖五則の
人よある。夫も平かもく和解兒童は時より善とす
仁義の道と妙と自ら賢者節儉し協い立身出世す
大倫とせし世とを比の具なり

早川人物故事

東都關雉元著 繪本全二冊

△人物故事とて上古神代より近世まであり
希まな郷地下人名和歌傳文の名有名
貫士の累傳より幸頼傳門醫學兼人徳治考士
列女の傳紀とて 武勇士嘉徳傳徳成六
小伝とて 本歴時代とて
主税とて 名有り人々
好士の誼い徳徳傳
傳のの載りつまじうなり且素の道と
要しといふはもと那那とて人々の伴等二郎

